旅と文化

発行所
東京都千代田区
神田神保町　2～30
財団法人全国
修学旅行研究協会
電(301)0531・2429
編集・発行人
永井　照

第2面には
修旅地をゆく（4）
『京都路』の
特集記事を掲載

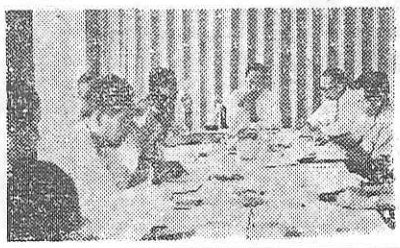
秋の修旅はじまる

国鉄輸送は　全国で延一、二一八本

秋の修学旅行は九月の新学期と共に開始され、専用電車〃ひので号〃が八月三十日品川駅を出発するのを皮切りとして、〃こまどり号〃が九月十一日大垣駅から、〃きぼう号〃が九月十四日神戸駅から夫々中学生を乗せて関西や関東方面へ出かけることになつている。専用電車以外の修学旅行も九月上旬から小口団体の専用列車で、各地から出発するので、例年の如く秋の修学旅行のシーズンは九月下旬から十一月上旬頃まで続くわけである。

国鉄本社の三十六年度秋季小口団体専用列車の輸送状況では次の通りになつている。

▼ひので号
8月30日―11月17日　八〇往復
▼こまどり号
9月1日―10月31日　四九往復
▼きぼう号
9月14日―11月22日　六九往復
9月24日―11月14日　四六往復
▼東京、姫路間
10月2日―11月12日　四二往復
▼大阪、東京間
9月21日―11月10日　三七往復
▼福井県中学校連合
9月6日―9月21日　一五往復
▼静岡島田地区小学校連合
9月7日―10月18日　三〇往復
▼名古屋地区小学校連合
10月5日―10月21日　一七往復
▼九州地区高校連合
10月4日―11月13日　延九四本
▼山口、広島高校連合
10月24日―10月31日　延一二本
▼北九州地区中学校連合
10月3日―10月23日　延二二本
▼関西地区高校連合
10月1日―11月30日　延一六〇本
▲名古屋地区小学校連合
10月5日―10月21日　一七往復
▼北海道地区高校連合
10月5日―11月20日　延一〇七本
▼東北地区高校連合
10月26日―11月10日　延二〇本


近畿、東海支部長会議の風景

近畿東海支部長会議開催

諸問題を協議　九月より活動開始

近鉄が走る社会科教室として近く建造に着手する〃修旅専用電車〃ビスタカーに関する詳細な打合せを兼ね、その他当面の諸問題の話し合いを行うため、去る八月三十一日午前十一時より大阪市上本町近鉄会館四階会議室において近畿東海各県支部長会議を開催した。

尚午後三時より引続き近鉄、ツーストの各代表を混えて打合せの懇談会を持つた。

会は先づ病をおして出席した山本理事長の挨拶より始り、永井事務局長の事業報告の後、協議に移つた。村田大阪事務局長より詳細な経過報告があり、活発な意見や質疑応答ののち、専用電車、専用船などについて近畿東海地区の活動目標と方法を決定し、九月より各県にてそれぞれ活動を開始することとなつた。

引続き午後三時より近鉄やツーリスト代表との懇談会を開き午後五時過ぎ閉会した。

当日の出席者は次の通り

近畿地区各県支部長、石川為蔵（大阪）吉田新太郎（奈良）宮所恒樽（和歌山）岡本仁（兵庫）芦田重左エ門（京都）

東海地区各県支部長、宮本秀吉（愛知）仲沢俊次郎（岐阜）伊藤好道（三重）

全修協本部、山本理事長、永井局長、中原次長、山本部長、村田大阪事務局長、近鉄本社、栗山部長、中沢課長、近鉄日本ツーリスト、渡辺部長、西久保次長、西田課長

修旅の事前事後指導や経費

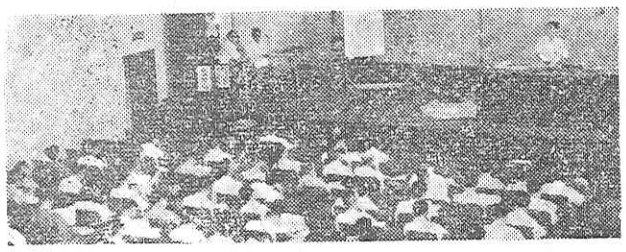
地理教育研究会全国連合会　第六回大会で発表

地理教育研究会全国連合会（会長松木茂）の第六回大会が、去る八月五日より八日まで青森県弘前市県立弘前中央高校において全国より五百人の参加者を得て盛大に開催された。第一日目は関東、東海地区の研究発表の後、日本大学教授飯本博士の「地理教育における二、三の問題」の講演があり、続いて弘前市内の巡検を行つた。

第二日目は関西九州地区の研究発表の後、東京教育大教授青野博士の「地理学者の見た最近のヨーロッパ」について自作スライドによる講演。引続き東北、北海道地区の研究発表があつた。第三日目と第四日目は一泊の巡検に行い大会は終了した。特に第一日目には次の如き修学旅行の事前、事後の指導や経費の分析などについての研究発表があり、今後の参考になる点が多かつた。

中学校における修学旅行の事前、事後指導―東京都を例として―
東京都文京区茗台中学校教諭　小椋　憲臣

修学旅行における経費の分析
静岡県立静岡商業高校教諭　近藤　正気


地理教育大会の模様

隨筆　教養と品性

栗間　久

一昨年の秋、教育事情視察のため欧米をまわつて、イングランドのエセックス県にあるセントマルテンス女子近代学校を訪問した時のことである。その学校に毎月一回生徒が一人ずつ交代で書く、『学校の歴史』という冊子があつたので、何気なく開いて読んで見たところ、中にドイツへ修学旅行に行つた際の記事があつた。

近いといつてもイギリスからドイツは海を隔てた外国である。中学生の修学旅行が外国行であるということに一驚したが、考えて見ると、戦前の日本にも中等学校生徒の満州への修学旅行など行なわれていたものであつた。それが敗戦後国土が狭くなつた上に、海外への修学旅行など絶えてしまつたようである。

ところが、全世界の現状は、相互の往来が目に増し、国境と人種の柵を越えての交わりは年とともに濃くなつて行きつつあるのが事実である。つまり、世界各国間の距離が狭くなつて来ているのである。従つて、生徒の修学旅行が国内だけでは満足できず、進んで海外にまで及ぶ日の来ることは決して遠くないという気がする。また、そうあつてほしいものだと私は思つている。

しかし、そうした国境を越えての修学旅行が実現する前に、是非考えておかねばならぬことがある。それはすなわち、世界的教養を身につけ、品性を高めるということである。

欧米の視察を終えて、私は日本の子どもの頭のよさと器用さは、他のどの国の子どもにも劣らぬことを認めることができた。しかしそれだから日本の子どもが世界中で最もすぐれているとは言えない気がする。公園の草花一本ちぎらないスイスの子ども、乗物の中で必ず大人に席をゆずる西ドイツの子ども、公園でも映画館でも紙くず一つ落さず交通のきまりを完全に守るイギリスの子ども、集団行動の際私語をしないアメリカの子どもたちを見ると、単に頭のよさや器用さではなく、やはり教養と品性、つまりは人柄が問題になつてくる。修学旅行先での逸脱や放恣は、国内でも問題である。まして、国境を越えた際は、大変な恥をかくことになるのである。遺憾ながら、今の日本人には、まだそうした自覚が充分できていない気がする。

遠い将来の海外への修学旅行はともかく、国内でも、恥かしくない修学旅行ができるよう、今日たいまのこととしてお互の教養と品性を高めて行きたいものである。

（筆者は元島根県中学校長会長　現在松江南高宍道分校講師）

修旅の体質改善を望む

―昔のムードをふりかえつて―

牛山　栄治

「東京で学び大阪で働らき京都で晩年をおくる」ことが、久しく日本人の恵まれた生き方とされたが、この判断は現代人にはそのままには受けいれられまい。しかし、京都が静的な都市であり、人文資源の豊富な観光都市であることは昔も今も変りなく、それ故にこそ日本一の修学旅行地となつているが、京都を正しく観察する為には、この京都の特徴によくマッチした静かなムードで、時間をかけて行うことが要諦で今日のようにきまりきつたコースをバスにゆられ、サービス過剰のガイド嬢のおしやべりになやまされ通しで、満員の観光客の中をおよぎまわつて帰るのでは、本当の京都の味はわからず仕舞になろう。

そこへいくと私の中学時代――それは大正天皇が即位の大礼を挙げられた昔だが――その頃の修学旅行は本当に快適であつた。生徒全員は六十人余で、四人の教師に引率され、京都だけの見学に三泊し、軽快な制服にゲートルばきでバスはおろか電車などにも殆んど乗車しないで歩きまわつたものである。勿論当時は観光会社的の存在はなく、計画は各学校で自主的にたてたものであつて、この旅行の印象はいまも強く残つている。

修学旅行はレジャー時代の行楽ではなく、教室の勉強を広い社会に移した大事な学校行事であるから、いつまでもインスタントで行うべきでなく、早くノーマルなこのような姿に戻す必要があり、やり方によつては、それが出来る時代になりつつあると思う。

○

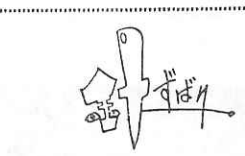
第一に現在の観光バスの使用と、一般旅客混用の旅館を排除することである。排除というと体裁がいいが、ぐずぐずしていると逆にこれらの施設は学生生徒を相手にしなくなろう。戦後バス会社や一般旅館は単価が安くても、水揚げが確実である修学旅行を経営の主体にしていたが、世の中の景気が出て、旅行が庶民階級に習性化されて来ると、学生生徒より率のよいこれらにバスや旅館はとびつき、学校は二の次になる。既にこの傾向はあらわれて来ているが、よくしたしもので、そうなると年々二千万人も動員される修学旅行専門の宿泊施設もどんどん出来て来るし、ユース・ホステル等も普及されて来て、現在よりも教育的で、しかも安全に廉価に利用出来よう。

暫て業者に一任しないと確保出来にくかつた輸送の問題も、「日の出号」や「こまどり号」のような専用車が続々出来るようになると、学校自体で自主的に修旅の計画をたてることも容易になる。引率生徒の人員なども他の条件が許されるようになるなら、二学級あたりを一単位として行動することも考えられよう。

このようにして各自の費用が低減される一方公費による補助が年毎に増額されて来ると、問題解決の最後のものは、文部省が示している旅行日時制限の緩和で、これなどは近い将来には当然改められると思う。

各学校とも、いつまでも戦後的な窮窟な現在の姿が、修旅であると思い定めてしまつてはいけない。色々な角度から思いきつた修旅の体質改善をはかるように理解をすつて努力することが大切である。そうなると、京都もいまの修旅では観察出来なかつた本当の姿を出して来よう

（日本観光学会々員　日本大学教授）

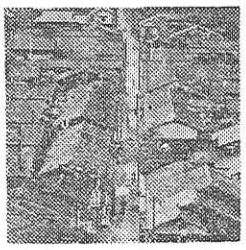


〃休んでいる教師の頭の中は〃
原　いさむ

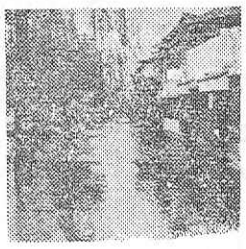
全修協新刊案内（お申込みは全修協事務局へ）
修学旅行読本
「関東の旅」
（写真地図多数挿入）
著者　日本大学教授　牛山栄治氏
A5版　80頁　五〇円　〒一〇円

修学旅行
―のご用命に―
営業所全国に120ヶ所
近畿日本ツーリスト
本社　東京都千代田区丸の内1の1（国際観光会館内）TEL231～4131

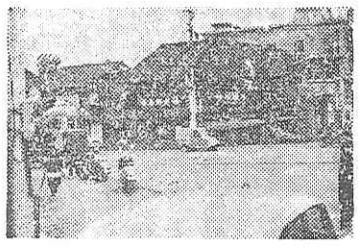
京都路
修旅地を歩く（4）



京都の古い道路と家並み

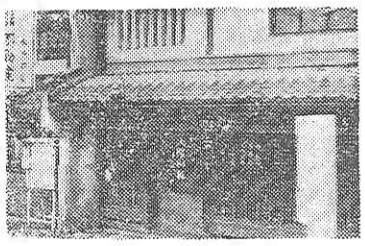


木屋町通りの高瀬川運河



仏具店

京都は寺の街といわれるほど到るところに大小のお寺があるが、それに伴つて仏具店が非常に多い。しかも京都の仏具店は仏壇、仏具法衣など専門店化している。



京都の町屋

間口がせまく低い二階家で窓は密な黒朱色の格子戸、入口に紺ののれんがかけてある。写真は烏丸通りの医院で、入口ドアーや外灯や二階の窓硝子が近代化している。

千年の歴史を残す
修学旅行地として最適の京都

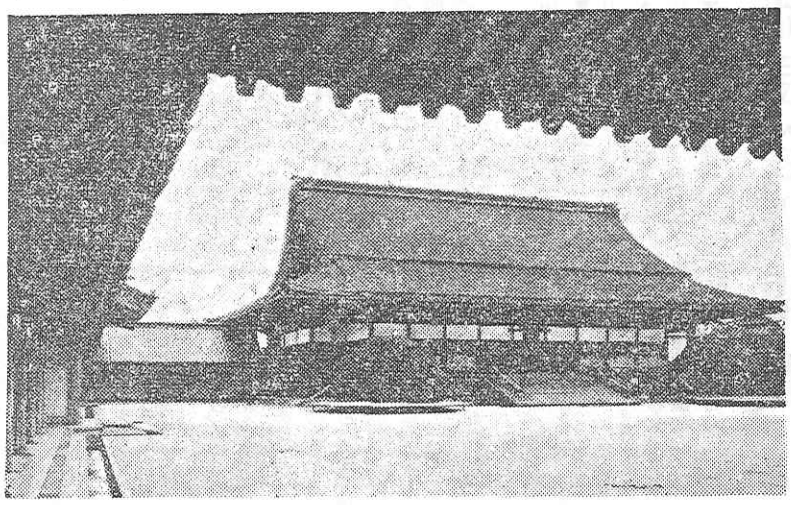
京都は歴史の街
年間百二十万の修旅生

京都市は京都盆地の北部の三方を山で囲まれ、鴨川と桂川の間に発達した古都で、西歴七九四年から一八六八年の間わが国の首都として政治や文化の中心地であつた。約千年の間には幾たびかの戦乱で焼けたが、残存したものや再建された寺社や古文化財が非常に多く、特に第二次世界大戦の爆撃から除外されたので、街全体が昔のままにそつくり残つているところに、京都が歴史の街といわれ、内外の観光客ばかりでなく、修学旅行地として全国の児童生徒が年間約百二十万ここを訪れるわけも、なるほどとうなづけるわけである。

多過ぎる社寺や史跡

京都の修学旅行で引率教師を困却させるのは、史跡や社寺、古文化財の多過ぎることである。現在京都市内に本山や末寺を合せて千六百三寺があり、神社が二百五十三社もある。国宝の建物が三六、彫刻が二三、書跡が八二、工芸が一四、絵画が四三、合計二〇〇で全国の五分ノ一以上の国宝が京都に残されている。その外、重要文化財や史跡名勝天然記念物、重要無形文化財などを合わせると、おびただしい数になる。

京都ばかりでなく奈良や鎌倉なども同様であるが、歴史の都を見学する場合、注意しなければならない点を二、三挙げてみよう。



御所内の紫宸殿

京都近郊を小学校中学校では一泊又は一泊で修学旅行をしている学校が大部分であると思う。その生徒が高等学校に来て又京都を巡検することになると、どう計画を立て、どのように調べるか検討も十分なされなければならない。

しかし高校生の修学旅行となると、方法に一考を要する点があると思う。修学旅行については、実施の時期、日時、引率の生徒数、などによつて方法に異いがあるが、その点は考えず共通した問題について考えてみることにする。

修学旅行の事前事後の指導、立案計画は十分検討して、実施することにして、現地指導を如何にするかに重点をおいて考えてみる。もちろんガイドまかせでなく、教師がマイクをもつてバス一台五十名とし、一日八時間、二日間の行程として京都市内を印象的に巡検する一案としたい。

一日八時間以内としたのは、それ以上になると神経感覚的障害とか情緒的障害とか、疲労のため事故の潜在的要因ともなるからである。千五百以上の文化財を二日で見学するのだから、見学題材を選定するにも重点主義とする。

東京都立桜町高等学校教諭　小沼常治

京都市の修学旅行一案（1）

第一日コース

出発を京都駅とし、烏丸通りを上り大谷大学、上賀茂より東地域の巡検、宿泊地を三条大橋付近にする。

第二日コース

三条大橋付近宿舎を出発し、北区から北山町、嵯峨野、西芳寺、桂離宮、東寺と西半分の巡検とし、時代的区分、見学ポイント、などは出発前に承知していてどう異らか、この寺はどこが見所か、どうしてここにこうした産業が行われるのかと考える見方で出発したい。

巡検順に説明を簡略に記し、見学目的要点を正確にしたい。

1、京都駅　八時出発

駅舎の建築様式はその都市の性格を標示するものである。

東京駅、大阪駅、奈良駅などを出発前にスライド、写真で十分説明しておくとよく理解される。それを物指として今の近代的な京都駅と焼ける前の駅とを比較し、古都としての京都市内の建築物との対象を考えさせる。出発時から今日の心構えを再び自覚させる

（つづく）

日程の組み方に工夫

先づ見学者の年令や学力に応じた見学地を選らび日程を組むべきである。

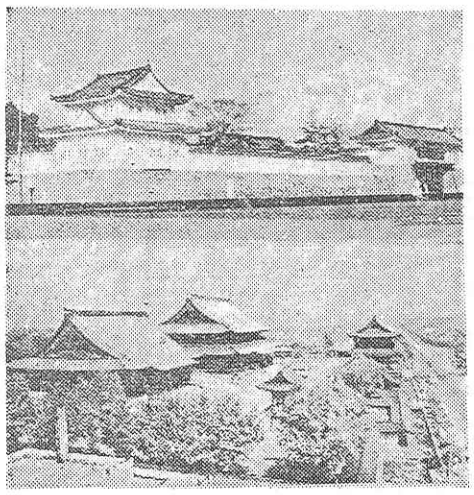
小・中学生は寺社を主体として見学させている学校の例が多いようだが、殆んどの児童生徒は無理解のままゾロゾロと歩いていると言つても過言ではあるまい。その時代の特長を残した建築物や文化財の代表的なものを少数選び、事前に充分指導した上で、ゆつくり時間をかけて見学させれば、児童生徒にも理解できると思う。修学旅行だからといつて、やたらに見て廻わるということは止めたがよい。

解説は引率教師で

次は引率者が見学地の説明をガイドにまかせないで自分で解説することである。しかし多くの修学旅行では教師が児童や生徒と一緒になつてガイドの説明を聞いているのが現状だ。これは引率教師が修学旅行を観光的な或はリクリエーション的な学校行事として考え、教室の延長として考えていないことによると思われる。

市民生活の観察

次に京都の修学旅行で見落し易いものは、街の道路、家屋、人情や風俗などである。舞妓を宿屋に呼び踊を見学させてお茶をにごしている教師がいるようだが不見識も甚だしい。江戸時代から明治、大正と近代の歴史の姿を街全体に残している京都のどこの町屋や道路や人の動きにも見るべき多くのものが残つているからである。



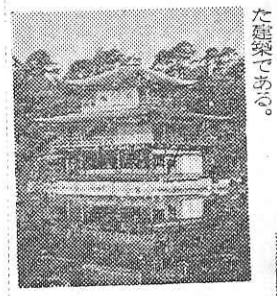
東本願寺

二条城

家康が一六〇三年（慶長八年）に造り家光が建増した桃山文化を残す宮殿建築の規模を示すもので、江戸時代約二五〇年間徳川家の京都屋敷であつた。二の丸御殿には狩野探幽などの襖絵その他がある

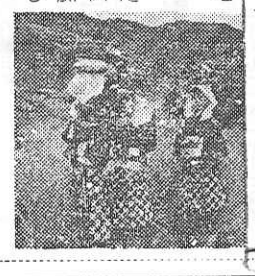
東本願寺

京都駅前の烏山通りにあり、一六〇二年（慶長七年）本願寺の強大な勢力をおそれた家康の分割政策により西本願寺から独立した。豪壮な大伽藍（明治二十八年竣工）は京都最大の木造建築である。



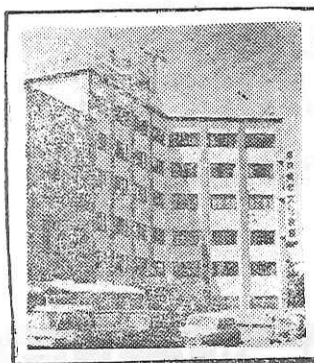
金閣寺

足利義満が一三九七年に造営したもの、昭和二五年に焼失、三〇年に再建された初層が寝殿造風、第二層が仏間風、第三層が禅宗の仏殿風で、王朝的と武家的を融合した建築である。



大原女

御所ぞめの帯に縞ふさの腰ひも、紺の木綿に白はばきをつけ柴を頭上にささげた典雅な姿が大原の三千院や寂光院の里に見られる。



環境と近代設備を誇る
修学団体 旅行のオアシス

宿泊料金
中学生　350円（2食）　1000名様の収容力
高校生　450円（〃）　新切、丁寧、清純
一般　600円以上（〃）　なサービス

来年度のご予約はお早くお申込みを

東京青年文化会館
東京都渋谷区千駄ヶ谷4の25　電話 東京（401）5111～5（千駄ヶ谷駅 代々木駅）徒歩3分

これなしで　現代の地理教育は　語れない

図説 日本文化地理大系

〔巻数及び刊行予定〕全18巻・隔月刊行
〔体裁〕B5大判・本文8ポイント二段組及び9ポイント二段組併用・平均384ページ・函入上製本・各巻に原色版24ページ・グラビア32ページ・多色刷大判地図2～4枚・大型写真500～600枚収載　特漉アート紙使用・総クロス
〔定価〕各巻払1,500円・全18巻一時払25,500円（1冊分割引）

姉妹篇 図説日本文化史大系　全14巻　東京・神田 小学館

LIHIT LAB.